卒業論文

今を生きるフェミニストのゆらぎと諦め

2019 年度入学

九州大学　文学部　人文学科　人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

1LT19308E 坪田優花

2023 年 1 月　提出

要約

19 世紀末から始まるフェミニズムは、現在は第 4 波の時代となった。その理論や活動は社会一般や学術的領域において取り沙汰され、社会レベルのマクロな視点から分析されるが、フェミニストの内面にある物語性についてのミクロな視点からの実証的分析は少なく、また躊躇無く肯定的に運動に参加するフェミニストの一面的な姿が描かれてきた。本研究の目的は、フェミニストの内面にアプローチするというミクロな視点からの分析を行い、フェミニストが抱える困難を明らかにすることにある。

まず、第 2 章において、波の時代区分を用いて第 1 波～第 4 波におけるフェミニズムの歴史を概観し、フェミニズムの流れを整理すると共にフェミニストがどのような状況下に置かれてきたのかについてまとめる。フェミニズムは第 1 波から現在の第 4 波まで、それぞれの時代の反省点を受け継ぎ変化し、時には変化することに失敗しながら歩みを進めてきた。その中で様々な主義主張が生まれ、マルクス主義フェミニズム、社会主義フェミニズムといったそれぞれの主義主張を冠した、いわゆる「冠つきフェミニズム」が登場するなど、その様相は複雑化してきている。それに加え、フェミニズムの歴史はバックラッシュや性的マイノリティの運動、ポストフェミニズムといった外部の動きとも関連性を持っている。日本においては 1999 年に施行された男女共同参画社会基本法を背景として 2000 年代にバックラッシュが起き、フェミニズムへのバッシングが行われた。性的マイノリティとの関係性においては、一部のフェミニズムが性的マイノリティの運動と上手く連動できなかった背景が存在する。そして比較的新しい傾向として、新自由主義的な社会において「男女平等はもう達成され、フェミニズムは不要である」とするポストフェミニズムの潮流も観察されつつある。フェミニズムはそういった動きを乗り越えたり連携に失敗したりしながらその議論と運動を深化させている。

次に第 3 章において、第 2 章で概観したフェミニズムの歴史と状況がどのように学術的に研究されてきたのかについて、Mary Hawkesworth (2019=2022)、清水晶子(2020)、江原由美子(1990)の議論を取り上げつつ整理する。Hawkesworth (2019=2022)は政治とフェミニズムの関連について、清水(2020)はクィアとフェミニズムの関連について、江原(1990)は 1970 年代・1980 年代のフェミニズムの論争について、整理・分析を行っている。それぞれの議論を要約した後、これらの研究の中ではフェミニズムの議論・運動に対して社会レベルのマクロな視点で分析・評価が行われているが、フェミニストたちが直面する

状況とそれをどう受け取るかの内面に着目するミクロな視点からの分析が行われることが少ないという点と、ミクロな視点の中でも肯定的に運動に参加する一面的な姿が描かれ、フェミニストが抱える葛藤や困難さなどに着目されることが少ないという点について指摘する。

第4章においては、6 名を対象に行ったインタビュー調査から得られた語りを記述し、そこから見えてきたフェミニストが抱える困難を続く第5章で類型化し、その背景について分析を加えている。具体的には、まず始めにインタビュー調査の結果を踏まえ、フェミニストが抱える困難さを【ジェンダー論争に対する疲弊】【フェミニストという表象へのためらい】【フェミニズムに反するアイデンティティの違和】【性的マイノリティへの遠慮】【周囲からの見えない圧力への苦しみ】の5つに類型化している。そして、特にその中の【フェミニストという表象へのためらい】における【自己位置づけの困難】、【周囲からの見えない圧力への苦しみ】、【性的マイノリティへの遠慮】の3つについて、第2章において記述したフェミニズムの状況が背景となって引き起こされたものであることを論証している。

第6章では、第5章で明らかとなったフェミニストが抱える困難さが、どのような帰結を生み出すのかについてゆらぎと諦めという観点から整理し、詳述している。ゆらぎについては、フェミニストの多様性によって自身をフェミニストとして確信できないというゆらぎと、フェミニズムに反する行動を取ってしまうことや性的マイノリティの人々を取りこぼしてしまうかもしれないという葛藤に直面することから生まれる、フェミニストとしての信条に対するゆらぎの2つがあった。対して諦めには、フェミニスト的意向を周囲からは受け入れてもらえないだろうと感じ自身の中に押し込めるといった、周囲への表出への諦めが見られた。加えて、SNS におけるジェンダー論争を目にし、フェミニズムが上手くいっていない現状であると認識することによって、フェミニストであることへの諦めを感じている姿も見られた。

目次

1　はじめに 1
2　フェミニズムのこれまで 2
2.1　フェミニズムの 4 つの波 2
2.1.1　第 1 波：制度における権利の獲得 2
2.1.2　第 2 波：家庭からの解放 3
2.1.3　第 3 波：インターセクショナリティの重視 3
2.1.4　第 4 波：オンライン上で広がるアクティビズム 4
2.2　複雑化するフェミニズム 5
2.3　フェミニズム運動を取り巻く環境 5
2.3.1　バックラッシュ 5
2.3.2　性的マイノリティとの関係性 6
2.3.3　ポストフェミニズム 7
3　フェミニズムが着目される側面 9
3.1　先行研究 9
3.1.1　フェミニズムと政治 9
3.1.2　クィアとフェミニズム 10
3.1.3　フェミニズム論争 11
3.2　先行研究の特徴 13
3.3　見過ごされてきたフェミニストたちの苦悩 13
4　インタビュー調査 16
4.1　調査概要 16
4.1.1　調査手法 16
4.1.2　調査対象者 16
4.2　インタビュー対象者の語り 17
4.2.1　A さんの語り 17
4.2.2　B さんの語り 23
4.2.3　C さんの語り 26
4.2.4　D さんの語り 29
4.2.5　E さんの語り 30

4.2.6　F さんの語り 35
5　フェミニストが抱える困難 39
5.1　ジェンダー論争に対する疲弊 39
5.1.1　SNS 上のジェンダー論争 39
5.1.2　過激なフェミニスト 40
5.2　フェミニストという表象へのためらい 41
5.2.1　フェミニストへの否定的なイメージ 41
5.2.2　フェミニズムの多様性による自己位置づけの困難 41
5.3　フェミニズムに反するアイデンティティの違和 42
5.4　性的マイノリティへの遠慮 42
5.5　周囲からの見えない圧力への苦しみ 43
5.6　困難の背景 44
6　考察 46
7　おわりに 48
参考文献 52
謝辞 54